

ベ ス ト ピ ア  
Bestopia

「パリ通信 78号」

<http://jkoga.com/>

平成三十年六月  
第七十八号

< 2018年6月 >

古賀 順子

「アルヴァ・アアルト『ルイ・カレ邸』」

パリからベルサイユ宮殿を越えて、南西40kmに小さな村バゾッシュ・シュル・ギュイヨンヌがある。家々の庭には6月のバラや青葉が美しく、小鳥がさえずる静かな木立の丘にフィンランド人建築家アルヴァ・アアルト(1898-1976)の「ルイ・カレ邸」が建っている。フランスにある唯一のアアルトの作品である。

フィンランドの「パイミオのサナトリウム」(1928-1933)、「マイレア邸」(1938-1939)、1939年ニューヨーク万博でのフィンランド館などで世界的に知られるアアルト。フィンランドの自然風景に着想を得ると同時に、CIAM(現代建築国際会議)を通して知り合うフェルナン・レジュ、ジャン・アルプ、アレクサンダー・カルダー、ラツイオ・モオリ=ナギら、前衛芸術家たちとの交流で影響を受けた象徴的でオーガニックな形状を特徴とする作品を残している。1920-30年代のパリは、前衛芸術の中心地であり、1937年パリ万博でフィンランド館を設計したアアルトに注目したのが、フランス・ブルターニュ出身の美術コレクターで画商のルイ・カレ(1897-1977)である。パリ8区メッシーヌ通りにギャラリーを有していたルイ・カレは、政治家ジャン・モネ(1888-1979)を介して、パリ郊外バゾッシュ・シュル・ギュイヨンヌの土地を購入。別荘ではなく、四季を通じて生活する住居としてアアルトに設計・施工を依頼する。1956年ルイ・カレ60歳の時で、予算に制限なし、屋根を丘と同じ傾斜にすること以外は、アアルトに全権委任した邸宅である。歳も近く、海が好きな二人は生涯の友となり、パリを訪れるアアルトはゲストルームに泊まっていた。

ジャン・モネ邸の向かいに位置する外門を入り、木立の小道を登ると、広い庭の一番高いところに白い壁と傾斜した屋根の「ルイ・カレ邸」が見えてくる。フィンランドから運んだ木材で作られた入り口を入ると、波の形になぞらえた松材の天井が人間味を持って迎えてくれる。脚が悪かったルイ・カレが歩きやすいよう

に階段の高さや幅も特別に計算している。客を迎え、画商の仕事をし、絵画を展示する公の部分に北に、寝室・ゲストルームを南に配している。西は広い庭に面した大きなガラス窓があり、庭ではガーデンパーティーを催していた。東に厨房、使用人の部屋、ガレージとプールがあり、静かでパリに近く、快適な住まいである。

そして、現在では細分化しているが、建物だけでなく、照明、椅子、テーブル、家具など、調度品すべてを建築家アアルトがデザインしている。建築家がデザイナーの役目も果たしているのである。建築と室内デザインが一体化するのは「バウハウス」以降で、中世の教会建築のように、無名の職人たちが万人のための教会を建てる、つまり、芸術、工芸、さらには工業製品を取り込む総合芸術としてのモダニズムを主張したのが新しい芸術運動「バウハウス」である。ペーター・ベーレンス(1868-1940)、ワルター・グロピウス(1883-1969)を中心に、1919年ドイツ・ワイマールに「バウハウス」の校舎が建つ。1924年からは Dessau に拠点を移し、1933年ヒトラーが政権に着き活動を停止し、ミース・ファン・デル・ローエ(1886-1969)はアメリカに亡命する。「バウハウス」の建築家たちにより、特権階級にのみ許されていた芸術は、一般の人々の日常生活の中にデザイン化され、工業化され、広がっていった。第一次と第二次世界大戦間の短いグループ活動であった「バウハウス」だが、現代建築の源泉となり、ピロティに支えられ、光を取り込むガラスのファサード、実用と審美を共有する構造を隠さない金属製の椅子やランプがオフィスや住宅に広く浸透していった。「ルイ・カレ邸」に3点下がっている「ゴールデン・ベル」(教会の鐘に着想を得てアアルトがデザインしたペンダント式照明)は、北欧の調度品として、アルテック社を通じて現在も生産が続けられ、多くの人々に愛されている。

「ルイ・カレ邸」見学は、3月から11月までの土曜日と日曜日のみ。予約必須で、午後14時から18時まで1時間毎(4回)、定員20名のみのガイド案内であり要注意。

アアルトのデザイン「ゴールデン・ベル」

